

天声人語

入院時に病院着やパジャマで悩んだことはないだろうか。診察や治療には好都合でも、着る物が選べないのは少し寂しい。見舞いに来てくれた知人に、ふだん見せない寝間着姿をさらす

のも恥ずかしい▼「病院でもおしゃれで着心地のいい物を身につけたい」。静岡文化芸術大学の藤井尚子^{なおこ}准教授(50)は、闘病中の義母(故人)に言われた。病院から支給されたのは浴衣型の寝間着。胸の部分が開きすぎていた。病気で痩せた体をさらすのがつらそうだった▼服飾デザインや染織が専門の藤井さんの探究心に火がとる。看護師らに脱ぎ着させてもらうのに便利で、着用感もよい「おしゃれ病衣」をめざした。調査で訪ねた北欧ヘルシンキの病院では、色や形など何種類もの病院着から患者自身が選ぶことができた。入院中も「自分らしさ」をあきらめずに済む▼着目したのは、名古屋^{ありまつ}市で長い伝統を持つ絞り染め工芸「有松^{なるみしぼり}鳴海絞」だ。布地に伸縮性が生まれ、袖口、ひじ、わき、足首を締め付けすぎず、緩みすぎない試作品ができた。胸や前首が透けず、脱ぎ着も滑らか。市販化をめざしている▼近年、主に女性患者向けの衣類が相次いで商品化されている。色鮮やかな作務衣^{さむえ}型のパジャマ、リボンが着脱できるニット帽、花柄の杖。専用の売り場を設ける病院もある▼診療の現場に支障が出ないよう留意しながら、入院患者がおしゃれを楽しめる選択の幅を広げる。病は「着^き」から。闘病生活に少しでも喜びが増えることを願う。